

P2-008

乳幼児を持つ母親の育児の孤立化：健やか親子 21 最終評価の全国調査より

山崎 さやか^{1,2)}、篠原 亮次³⁾、秋山 有佳⁴⁾、山縣 然太郎⁴⁾

健康科学大学 看護学部¹⁾、
山梨大学大学院 医工農学総合教育部²⁾、
山梨大学大学院 総合研究部附属出生コホート研究センター³⁾、
山梨大学大学院 総合研究部医学域社会医学講座⁴⁾

【背景】育児の孤立化は、児童虐待の可能性を高め、子どもの発達に悪影響を及ぼす可能性がある。昨今、育児の孤立化は都市化と家族や地域コミュニティのサポートの希薄化により増加していると考えられる。

【目的】本研究は、健やか親子 21 最終評価の調査結果を使用し、母親の子育てや関連する個人的要因および、社会人口学的、心理的要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は、健やか親子 21 最終評価実施対象となった全国 472 市区町村で平成 25 年 3 月から 8 月の期間に、3、4 か月健診、1 歳 6 か月健診、3 歳児健診を受診した児の保護者である。方法は、各市区町村の母子保健担当課から乳幼児健診の対象となった保護者にアンケートの記入を依頼し、健診時に回収した。分析は調査項目に欠損値がなかった 67,115 人の回答者のデータを分析した。

【倫理的配慮】山梨大学医学部倫理委員会の承認を得ている。

【結果】分析対象者において 0.2% (156 人) の母親が育児の孤立化を経験していた。出産時に 35-39 歳の母親、3 歳の子供を持つこと、就業していないこと、経済的困難を感じていること、育児にほとんど参加していない夫、東京都の特別区に住んでいる母親は、これらに該当しない母親と比べて、育児の孤立化のオッズ比が有意に高かった。また、育児不安も育児の孤立化と有意に関連していた。

【考察】結果は、育児への父親の関与の重要性を強調し、育児の孤立化を減らすための支援を検討する必要性が示唆された。

P2-009

定型発達児・発達障がい児をもつ親と養育レジリエンス・子育て経験の検討

塩田 昇¹⁾、江上 千代美¹⁾、石橋 美穂²⁾、田中 美智子³⁾、山下 裕史朗⁴⁾

福岡県立大学看護学部¹⁾、
NPO 法人前向き子育てふくおか²⁾、
宮崎県立看護大学看護学部³⁾、
久留米大学医学部⁴⁾

【目的】発達障がい児をもつ親(DD-P)は定型発達児の親(TC-P)と比較して育児困難感が高く、親のメンタルヘルスが悪化する傾向にあり、児を取り巻く環境を含めた介入が必要である。親のメンタルヘルスや育児困難感には養育レジリエンスが影響をするものの、DD-P と TC-P を比較した報告は少ない。そこで、DD-P と TC-P の違いが養育レジリエンスと子育ての困難感、親のメンタルヘルス、パートナーとの協力に与える影響を検討した。

【方法】子育て講演会の参加を希望する親へ 327 名中、口頭と文書で研究主旨を説明し、文書にて同意を取ることができた 206 名 (DD-P 135 名、TC-P 71 名) を研究対象とした。養育レジリエンス質問紙 (PRQ)：下位尺度は子どもの特徴理解・社会支援・肯定的解釈、子育て経験尺度 (PES) を用い、子育て講演会前に記入してもらい回収した。DD-P と TC-P の比較は対応のない平均値の差の検定 (t 検定) を行った。有意水準は $p < .05$ とした。本研究は福岡県立大学倫理部会 (H30-28)、久留米大学研究倫理審査委員会 (23-268) により承認を受け実施した。本研究において利益相反はない。

【結果】DD-P と TC-P を比較すると、PRQ では社会支援と合計が TC-P で有意に高かった ($p < .05$)。肯定的解釈と子どもの特徴理解では DD-P と TC-P を比較して差はなかった。PES 尺度においてすべきことが多い、ストレス、落ち込んだ気持ち、しつけの一致度、パートナーとの協力度が TC-P で有意に高かった ($p < .01$)。子育ての困難度、子育ては報われるもの、子育ての自信度、パートナーとの幸福度は DD-P と TC-P を比較すると TC-P で有意に高かった ($p < .05$)。確かな結果が出る、得られた助けでは DD-P と TC-P を比較して差はなかった。

【結論】DD-P は子どもの特徴理解、肯定的解釈で TC-P と変わらないが相談できる人や頼りになる人が不足し社会支援の活用が十分でない可能性がある。DD-P は親としての役割を果たす上での支援については TC-P と変わらないが、養育レジリエンスの結果より困難を乗り越えるために必要な社会支援は十分に活用していないことが推察される。